

大祓祝詞（現行の普及版／大正三年制定版／八神邦建・現代語訳）

無限の高みに果てしなく広がる神々の世界に、永遠の太古から現在までさらに永遠の未来までお住まいになられ、今や天皇皇室を子孫として慈しまれる高御産巢日神と神産巢日神が、はるか太古の神代に威厳をもつてお命じになったことがある。神界の広く安らかな河原にあらゆる神々を召集し集めに集め、つぶさに繰り返し念入りに八百万の神たちの会議にはかられた結果、「わが親しく愛する子孫の神は、葦原が豊かに茂るように稲穂の実る地上の国を、これから安らかな国となるよう平和に統治しなさい」と、番能邇邇藝命（番仁岐命とも表現）に御委託になられたのであった。

このように御委託になられてから、地上の国じゅうの荒く猛々しい国津神たちに、御委託の国づくりに従うかどうか、幾度も問いかけと説得を重ねられ、逆らうだけの神たちをば、追い払うことを重ねられた。荒く猛々しい国が鎮まるにつれて、言葉を放って問いかけていた岩や木や蔓や草の葉の類も、言葉を発することもなくなった。そして、天上と地上をさえぎる大岩のように固く嚴重な門を開き、天と地の間の無数に重なる幾千もの雲を、御神威によって両側にすっかり押しつけられ、御命令された通り番能邇邇藝命を、地上へとお降ろしになられた。

このように御委任なされた国の四方まで、番能邇邇藝命の御子孫が御神意によって大いなる平和を成し遂げ、日神の高く御照覧される国を、安らかな国となるよう統治すべくお定めになったので、大地の底の岩盤に神聖なお宮の心（しん）の御柱をゆるぎなく建て、無限の高みに果てしなく広がる天上の神々の世界に向かって、屋根の千木（ちぎ）を高くそびえさせ、天皇皇族の麗しい幸い多い御殿をおつくり申し上げ、日差し、夜露、風雨にさらされることのないようにした。そんな安らかに平和にご統治される国の中にも、天より生まれ出て殖えてゆく民びとが、あやまちを犯してしまいう様な罪過がある。

高天原で素戔嗚神が行った天津罪・国津神の前に罪となる国津罪などなど数々のたくさんの罪が現れ出る。

このように罪が現れたならば、高天原の神の宮でお定めになった儀式にのっとり、固い神聖な木の根元を切り、葉末を断ち切り、罪を贖う供物をたくさんの台座に十分に積んで、神聖な菅（すげ）を根元から刈り取り、葉末を刈り切っていくつにも割き、神聖な木の杖と菅紐をもちいで、天上で神々がお唱えになる祝詞の中で最も尊く御神威あらたかな詔（みことのり）を奏上しなさい。

そのように奏上したならば、高天原の神々が、天上と地上をさえぎる大岩のように固く嚴重な門を押し開き、天と地の間の無数に重なる幾千もの雲を、御神威によって両側にすっかり押しつけ、地上の民の天津罪のありさまをすっかりご覧になられるであろう。地上の神々も、高い山の頂き、低い山の頂きにお昇りになり、高い山、低い山にたちこめる霧や霞や山気をかき分けて、民の国津罪のありさまをつぶさにごらんになれるであろう。

そのように神々がごらんになられたならば、民の罪という罪を祓い清めてもはやひとつの罪も残すまいと思召すであろう。その祓い清めるさまは、風の神の吹き付ける大風が、幾重もの分厚い雲の層をことごとく遠くへ吹きはらうように、大きな港に泊るいくつもの大きな船たちの引き綱も臚綱も解いて、ことごとく外洋に流し去ってしまうように、遠くまで続く鬱蒼と茂る木々の根元を、硬く焼き入れした切れ味鋭い鎌で、ことごとく刈り払ってしまうように、もはや残る罪などひとつもないようにお祓いになられお清めになられる。

このように高い山の頂き、低い山の頂きからほとばしりなだれ落ち水煙をあげる急流の瀬にいらっしやる瀬織津姫という神が、民の罪穢れを大海原まで運び流し、このように運び流された罪穢れを、荒々しい大小無

数の潮流がせめぎあいぶつかり合う大渦潮にいらつしやる速秋津姫という神が、音をたててまるごと海流を飲み込み、このように丸飲みされた罪穢れを、海底と地下世界の境の息吹戸にいらつしやる息吹戸主という神が、地下の根の国底の国に、大息を吹きかけて放出される。このように放出された罪穢れを、根の国底の国にいらつしやる速佐須良姫という神が、速やかにちりぢりに放ちやり消滅させる。このようにして罪穢れが放ちやられて消されたならば、今日このときから、もはや罪穢れは全くあるまいとお祓いなされお清めなされることを、天津神も国津神も八百万の神々も、ともに御覧くださいと申し上げ奉ります。